



芳川 春清園
 岡本 起泉齋
 楊洲 周延画

行果齋藏

ふむたのすけあけがのとし

初編 寫鮮堂梓





芳川春壽院

旗洲唐延畫

初編上

梓壽堂鮮島

A497

48-2185

津村田之助

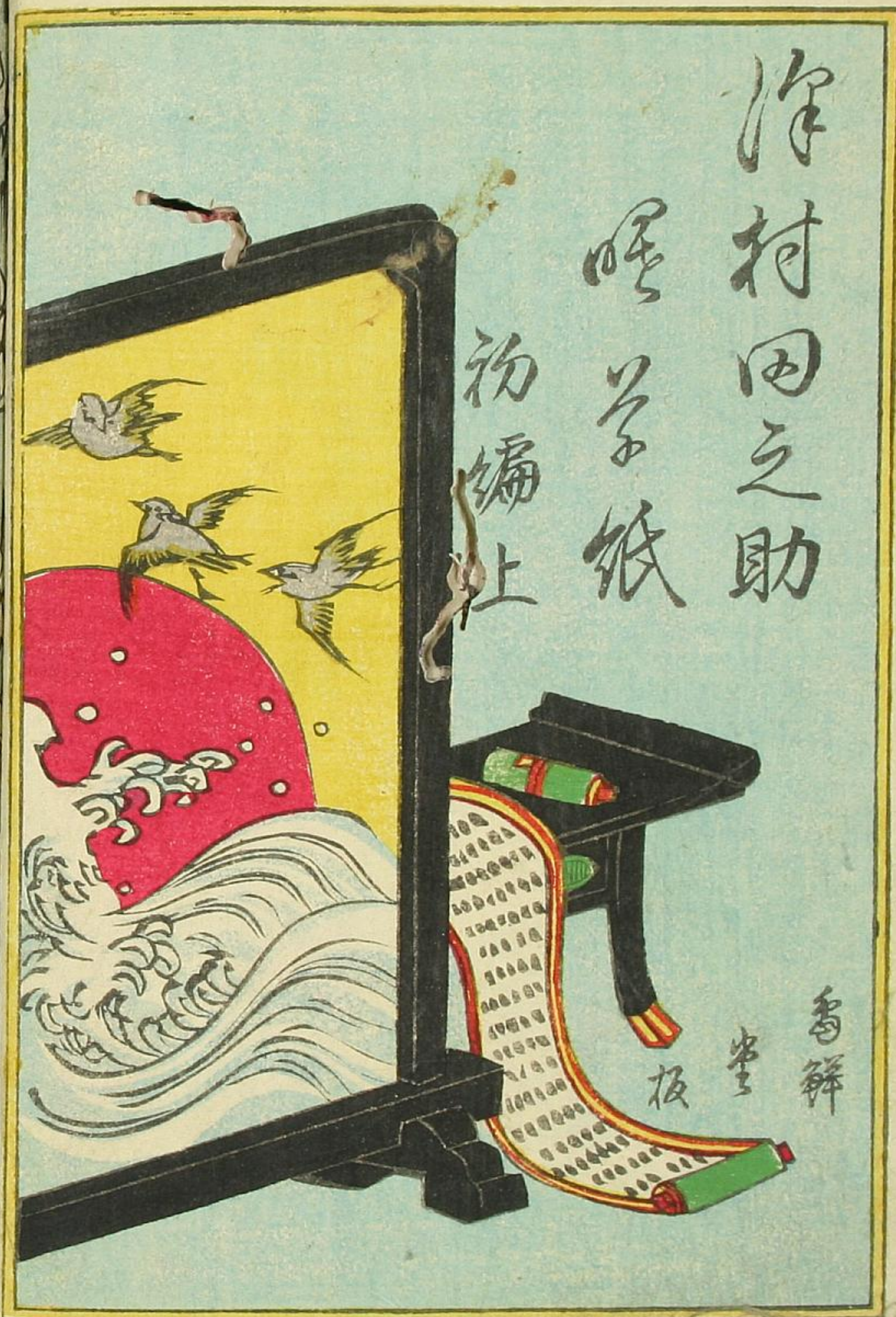
曙草紙

初編上

香餅

巻

板



田中一と角負せしと... 倭一流と号之名題の發せし... 例の... 五代田坂赤彦三が... 一巻の事跡と編... 巻の... 内所と... 解の... 一巻の事跡と編... 巻の... 一巻の事跡と編... 巻の...

由 明治廿三年ある文月 岡本起泉題



能
優
澤村田之助

清元の名取
春の屋志女寿



柳橋
吉野屋小静

日之



小まの姉
千代吉

小まの母
おとら



○縁練り
花のまを回す
振中半の棟
高く傳へ
寄る松の梢の
風月うらぬ妙の樂と奏
異香入の袖と花より
越部と花も
ちかく酔える
そ有揚は是や彼
の池楽津去も同なり
最もそとくそ
まへ京都の比叡の山

△因も縁せの物
つ芳花足群集
の心が自然鳴るも
舞よる法の初老
妙更寄故一切皆
人々が皆頂天上
の伊樂も是六
如るがとと我且
花よそが中水際
の池樂津去も同なり
最もそとくそ
まへ京都の比叡の山



あが 花と 少女 人同と

ついで 張屋 打付 くれの方 かに祝ハ

逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの



両大師

逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの 逃げの

つぎ遠くへ馬けし観正

院の妻の侍ゆへ又若

と成院へ侍居間ホ

通して茶と菓茶と

持はし四方の茶給はせ

まとうく遠きゆへ又若

向ひ習せ密カ

柳子茶の身

ねつと市し

あへ路の後

ていふは元利

白雲



海村守十郎又長十郎

ホ二人の男中り見せ

始は藤平といふ是の

苗田の海村惣井

今の助多屋多助

さう藤と幼名由政

といふ



先刻

今奉(安政三年)の

二月より

改名世が先刻の

災少幸あて高幸

く十五才多れど

生徳被のさう藤

及小松も衆人の

上は出で既小嘉

永元年の十一月

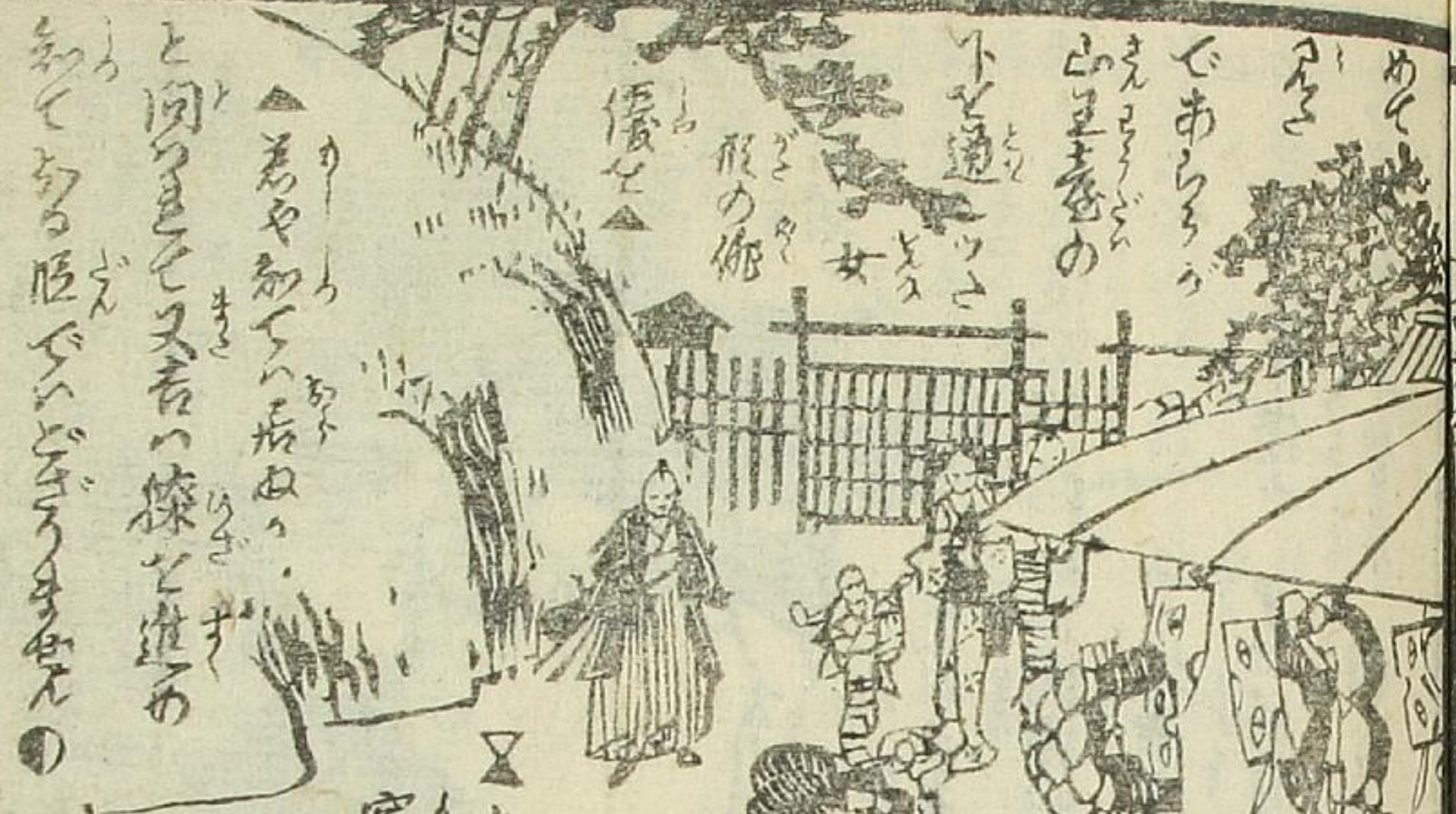
中村佐の頼見世

根云の大切障り

道仍古々陽

小父長十郎の

忠を奉



既小那雨と

一雨小系ツ之絶

て馬今被のせさう

委

中しませら

容併しつ候如し

永永六年

傳りもさく

名古屋あて故人の教み加り



浮村

田里助

野子銭

初篇

芳川

寛

愚本つる

周延画

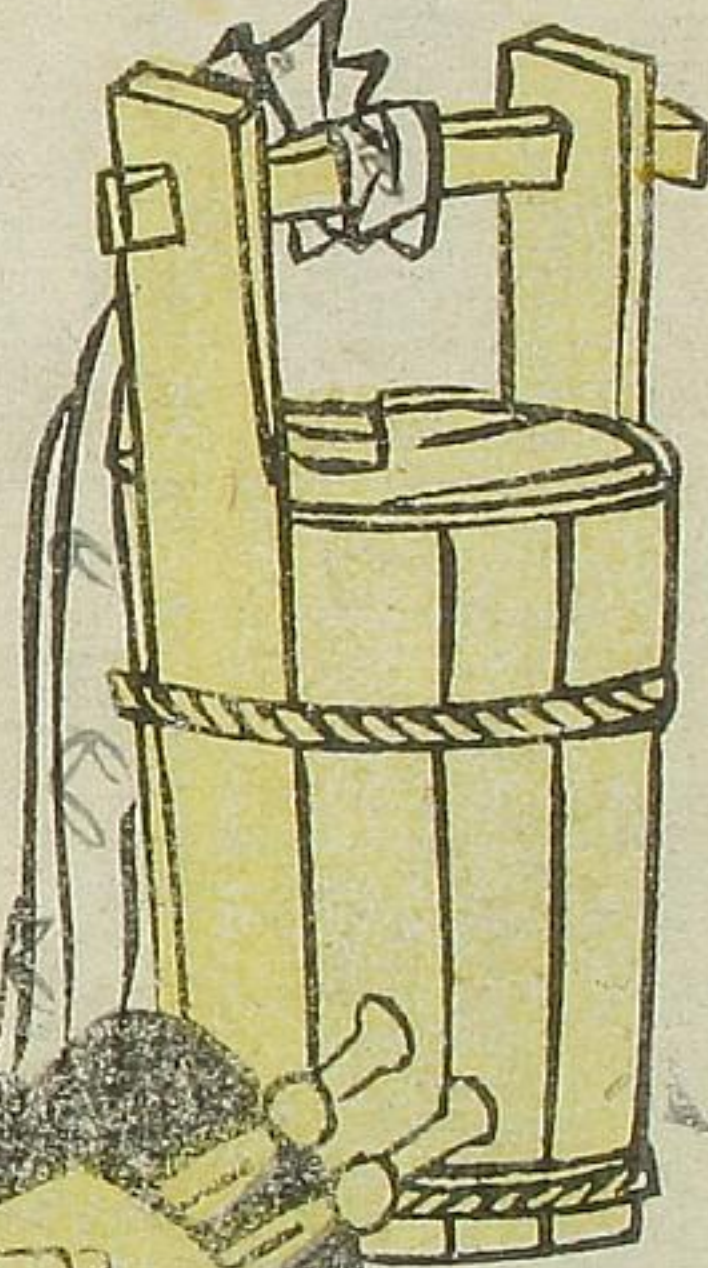
中の

巻

板

解

多



台泉薬と毎之を委細と

云合め指と尾

○初て短膝を又者のいどうせオイ
それと田の助が取知とまは
とととと鬼も角もあつ

てんんと湯若草菊
尾橋際のは居

ゆき様若所の田

の助が宅へいをててもあつねはよと
すいせんをて
まふと男へあつひがたふ



○お女くお令

あ外のりあつねが打付

あおひつひるん利とる送
の老ふは三つりの合



冷笑以次

田の助

今更ん馬麻のつと

換板は又吉の商標

必定と信是工まはむと

權き一がえりうの

智恵の出るる者

憂くのも解りの座ちく

保登とせんと或夜道

青へ出りけ彼の邪

萬葉といふ明ひの

節七六海田の



最上の万葉書と甜中

多十の八九の相ふ

かき事放

出味

聖田

庭の上

院小赴き最上の

番手書と田の助

青と好む所

後ごと素

田の助が田

万葉といふ

節七六海田

の節七六海田

一併や二併

何でもの

万葉書の



万葉書の

一併や二併

何でもの

万葉書の

一併や二併

何でもの

万葉書の

一併や二併

何でもの

万葉書の

一併や二併

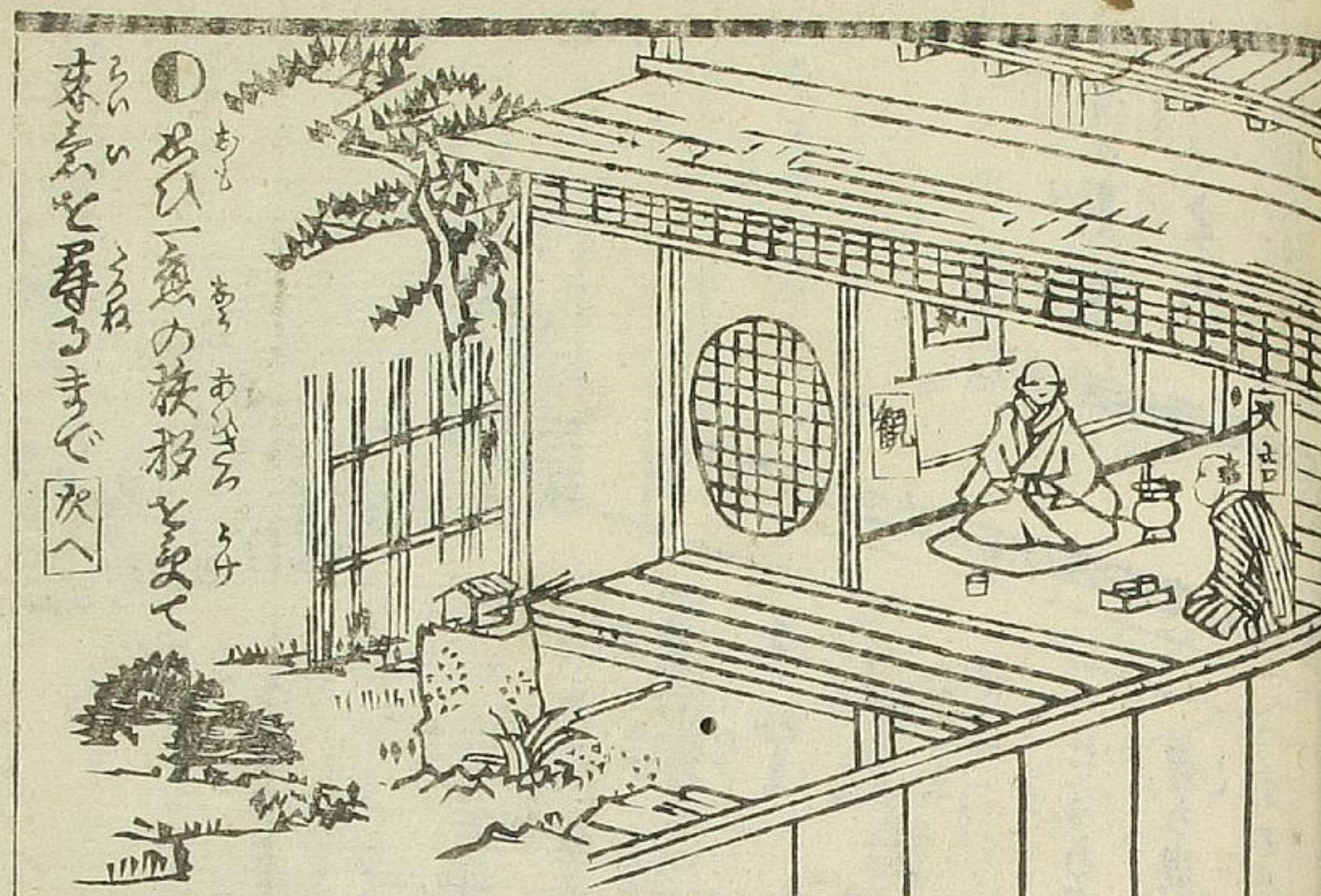
何でもの



二百四十の合

合一辨ハ世の中
 持多持少と
 之の放多の
 求めて遣りて

せん
 縁を
 次
 の
 孫
 疾



○あひ一愈の放投とて
 末念と尋るまで

横にお目お望ふと申し
 ますの君の身と尋ねても一向にや
 是れとも違ふ何ひも候があるとは何と申して
 候りませぬが如何に申せるとの口上を院を
 不審と云ひて我身にかさねのさかたねの君
 由西をせんを度裏の客の通させと申す
 されば是れは疑ふまじの下の心は眼
 まるねの店のみ付ての嘆れんと



つぎと縁して
 あくらの母を在る十男
 徳と父の素より雲水の
 経ともるゆ成と初れに連中
 親子の名あり叶る辰
 こととあふ経巻と
 懐み腸と朝に
 由何る歎き
 亦疎ふ給る時
 あつてあつてあつてく過るる
 一昨年舟の上より易者ふ



まのとお徳
 小世帯と仕
 孫と引
 つと違々
 出まして

世とて
 出まして
 途中
 由出
 家と
 と
 と



○ふて
 昔ふとけ子の
 又ハ東南ふ
 方のお徳
 大徳ふ
 信をあるあふ
 尋ねてけいけい
 此ら徳の徳とと
 中世が徳と徳と尋ね
 の西冷あふらとと

わん
 年の十月のありツキリ
 作が弱くあり力業が叶
 の取本徳を磨て生後ハ
 僅うの令と徳本ふ子徳の
 徳と徳と徳と徳と徳と
 一徳と徳と徳と徳と徳と
 徳と徳と徳と徳と徳と
 あり徳と徳と徳と徳と徳と
 とそおふの徳と
 徳と徳と徳と徳と徳と

縁の現き

あつたあつたと候り
ゆいしん道りあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

一面に金巻コイツハ
縁の現き
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた



△一辨二回との方年考と
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた



あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

一、（一） 田之社中
 二、（二） 田之社中
 三、（三） 田之社中
 四、（四） 田之社中
 五、（五） 田之社中
 六、（六） 田之社中
 七、（七） 田之社中
 八、（八） 田之社中
 九、（九） 田之社中
 十、（十） 田之社中
 十一、（十一） 田之社中
 十二、（十二） 田之社中
 十三、（十三） 田之社中
 十四、（十四） 田之社中
 十五、（十五） 田之社中
 十六、（十六） 田之社中
 十七、（十七） 田之社中
 十八、（十八） 田之社中
 十九、（十九） 田之社中
 二十、（二十） 田之社中
 二十一、（二十一） 田之社中
 二十二、（二十二） 田之社中
 二十三、（二十三） 田之社中
 二十四、（二十四） 田之社中
 二十五、（二十五） 田之社中
 二十六、（二十六） 田之社中
 二十七、（二十七） 田之社中
 二十八、（二十八） 田之社中
 二十九、（二十九） 田之社中
 三十、（三十） 田之社中
 三十一、（三十一） 田之社中
 三十二、（三十二） 田之社中
 三十三、（三十三） 田之社中
 三十四、（三十四） 田之社中
 三十五、（三十五） 田之社中
 三十六、（三十六） 田之社中
 三十七、（三十七） 田之社中
 三十八、（三十八） 田之社中
 三十九、（三十九） 田之社中
 四十、（四十） 田之社中
 四十一、（四十一） 田之社中
 四十二、（四十二） 田之社中
 四十三、（四十三） 田之社中
 四十四、（四十四） 田之社中
 四十五、（四十五） 田之社中
 四十六、（四十六） 田之社中
 四十七、（四十七） 田之社中
 四十八、（四十八） 田之社中
 四十九、（四十九） 田之社中
 五十、（五十） 田之社中
 五十一、（五十一） 田之社中
 五十二、（五十二） 田之社中
 五十三、（五十三） 田之社中
 五十四、（五十四） 田之社中
 五十五、（五十五） 田之社中
 五十六、（五十六） 田之社中
 五十七、（五十七） 田之社中
 五十八、（五十八） 田之社中
 五十九、（五十九） 田之社中
 六十、（六十） 田之社中
 六十一、（六十一） 田之社中
 六十二、（六十二） 田之社中
 六十三、（六十三） 田之社中
 六十四、（六十四） 田之社中
 六十五、（六十五） 田之社中
 六十六、（六十六） 田之社中
 六十七、（六十七） 田之社中
 六十八、（六十八） 田之社中
 六十九、（六十九） 田之社中
 七十、（七十） 田之社中
 七十一、（七十一） 田之社中
 七十二、（七十二） 田之社中
 七十三、（七十三） 田之社中
 七十四、（七十四） 田之社中
 七十五、（七十五） 田之社中
 七十六、（七十六） 田之社中
 七十七、（七十七） 田之社中
 七十八、（七十八） 田之社中
 七十九、（七十九） 田之社中
 八十、（八十） 田之社中
 八十一、（八十一） 田之社中
 八十二、（八十二） 田之社中
 八十三、（八十三） 田之社中
 八十四、（八十四） 田之社中
 八十五、（八十五） 田之社中
 八十六、（八十六） 田之社中
 八十七、（八十七） 田之社中
 八十八、（八十八） 田之社中
 八十九、（八十九） 田之社中
 九十、（九十） 田之社中
 九十一、（九十一） 田之社中
 九十二、（九十二） 田之社中
 九十三、（九十三） 田之社中
 九十四、（九十四） 田之社中
 九十五、（九十五） 田之社中
 九十六、（九十六） 田之社中
 九十七、（九十七） 田之社中
 九十八、（九十八） 田之社中
 九十九、（九十九） 田之社中
 一百、（一百） 田之社中



芳川春海同
 其名も高橋
 毒神のの傳
 岡本起泉編
東京奇聞 七編
 御所桜梅松録 十五編
 進出板

芳川春海同
島田一郎梅雨日記 五編
 命養生善惡鏡 折本
 一冊

芳川春海同
白草阿穀系顛末 三編
 芳川春海同
 澤村田之助曙草紙 五編
 大尾

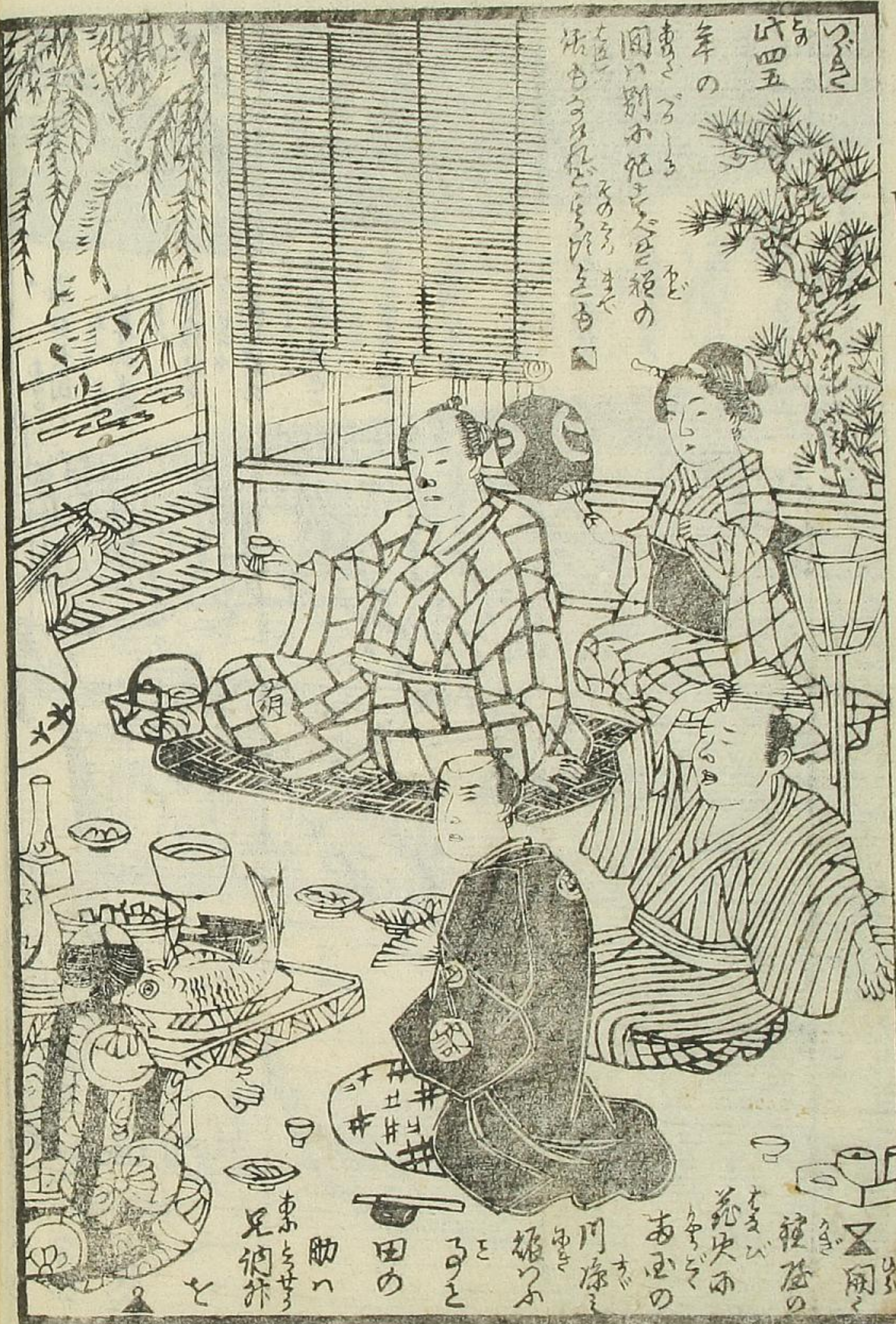
芳川春海同
坂東彦三傳一流 三編
 讀切
 徳川年代鑑 折本
 一冊

龜地本問屋
 錦繪
 編輯人 岡本勘造
 淺草區瓦町十二番地
 出版人 網島龜吉

岡本起泉綴

初編下





日 一 四 一

日 一 四 一

ついでに自前掛ひの氣放し小美盛頭より家と
 出で山の右の海岸より船と産以存とかくふ小
 備中はび一解と川風小招く風情の青竹

橋の二階より早らも足ついで
 船のてしけ船と張来うせ已が

酒後へ帰ひし林田
 関の町小佐む道中内

有馬屋何来

とて日瀆紀の風流見たり
 老ゆては日ハ花火見物の時

柳橋小全盛とそび
 藤公若小静と度

妹分めては頃



田の助は小静の心を
 面と先合ると小静は
 掛し仍焼の火さひふ
 酒後と立却て昔小
 階子と中らんと例ま
 ありて子代若回忍見と
 ありと今
 あり入
 遠とも

弘めを〜千代
 赤の二人と伴ひ



△女の二階と借

うけ既小酒宴と〜きし

有馬屋へ孫々母入り花火の方へ

兄向もやうば飲つ後芳思ひせり紀の

堂屋足寄寄小踊らせらるじと紙びと

梅の中おも田の助は

水もあはて小静と法合り

通いせあはれも首尾も

先判うす情の入り

田の助は小用も

かへをぐの娘〜
 とまより〜
 取柄はういのそりた

田の助の取の〜
 られて姉の小静は
 何々とんせつけ

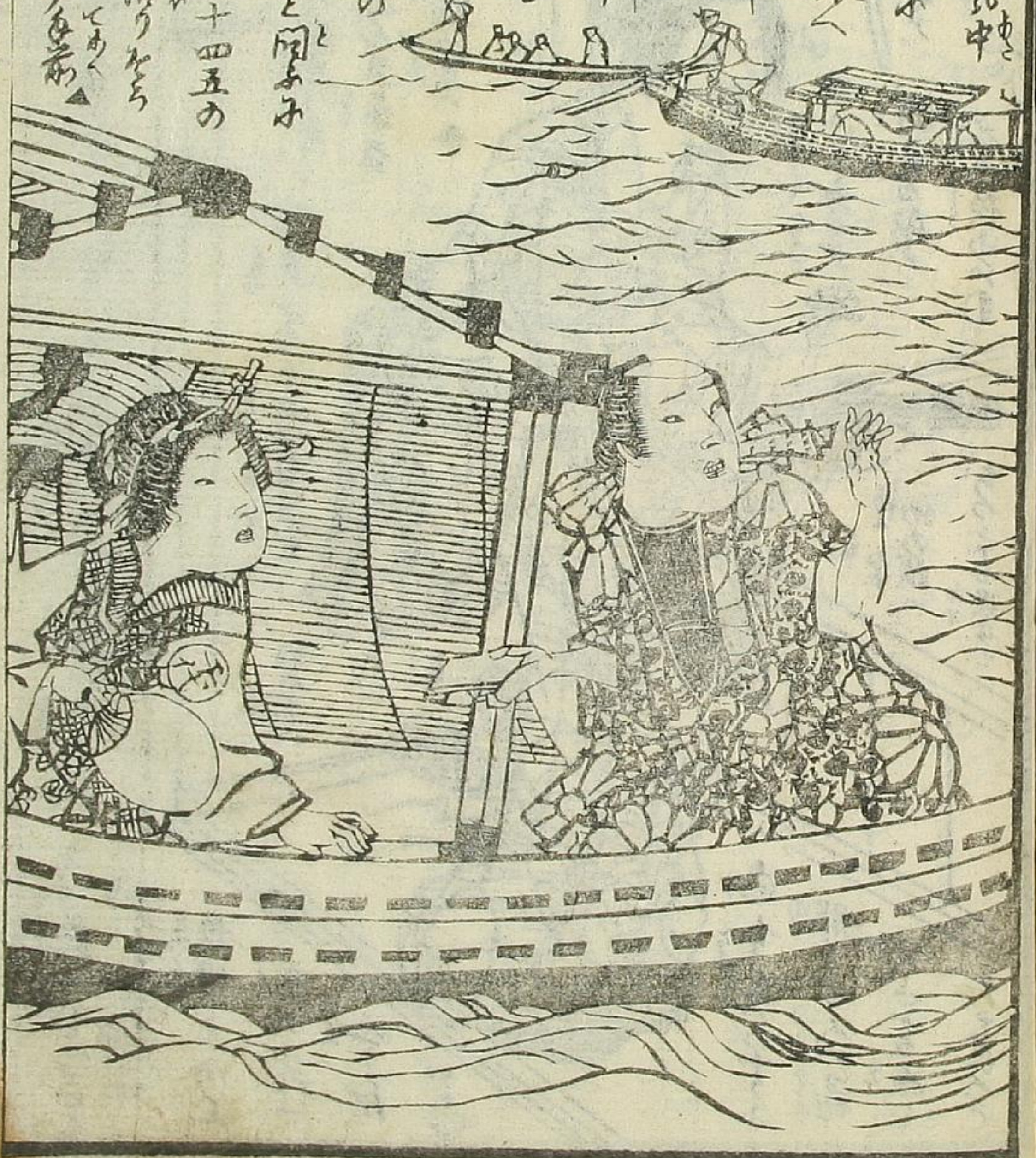
は幼子渡せと決

つぎ 志まづら由まご生娘あそぶの勢好と
 知れり 於るあひの夜のち
 受まじして花火のつら果てればバイザ
 是うかへ上白一登つて涼まると有馬
 屋の尻若何由も支交せ救回一家根
 船二艘小舟つり隅田川を漕ぎり十
 小舟は是より久しかりお今宵へ有馬で
 夜せぬえと具不意する
 有る馬が例の癖とて
 舟も若ますは一回小
 山谷はうら上る中に
 十代若へ如何おせり
 志まじ地悪いと水あゆ



困るぞら
 とあるの何のツ
 てりかひあす
 うらねん
 久小ナ
 ける
 ける

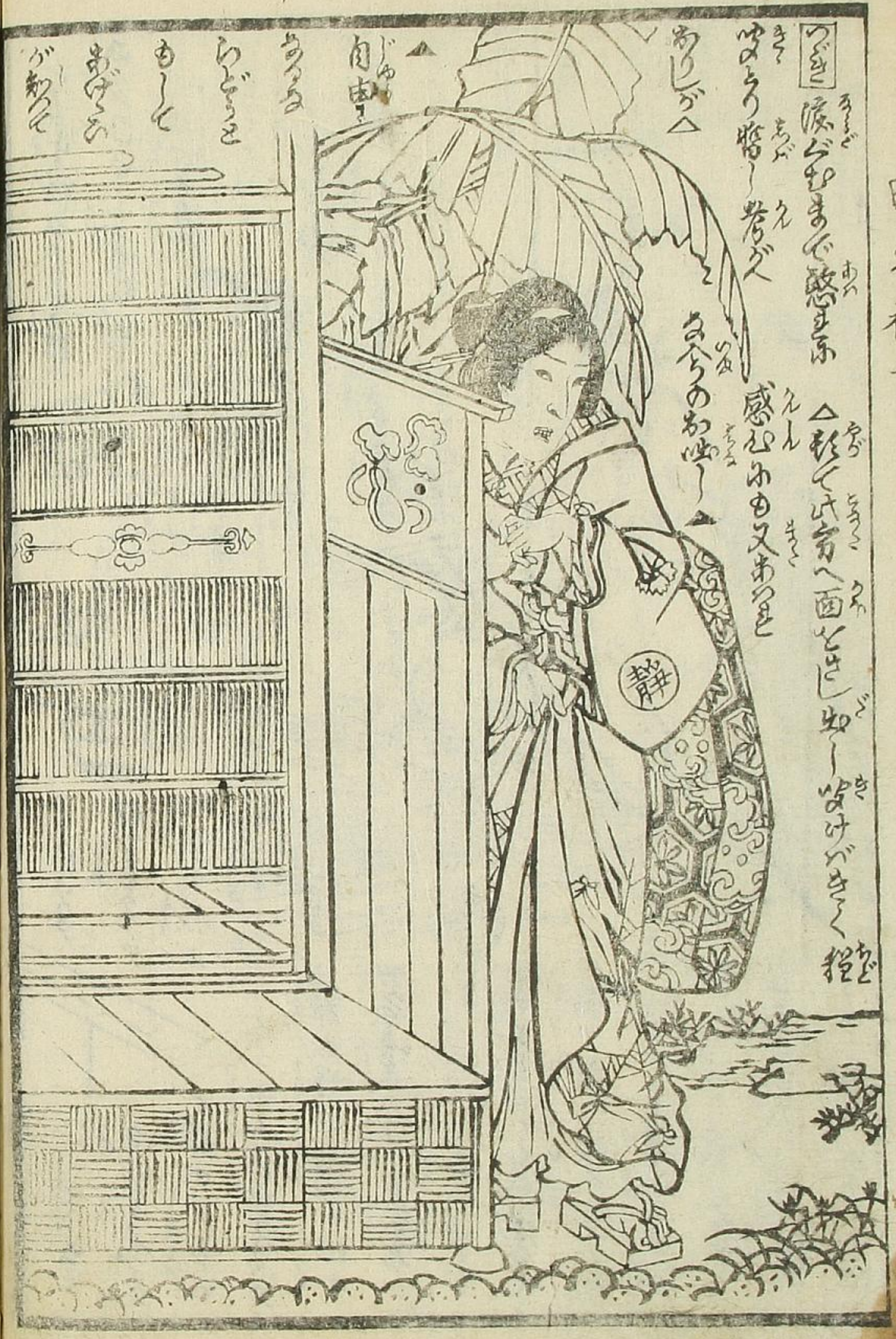
徳一ぬ根子小異勢中
 至はくもあそん結小
 塚も船で長より長へ
 疾うかるとと暇が半
 田島あ代若い若二人
 家根船の中おお外
 多々今い時うはを
 船政かむををせけ
 八才一両ああい公船の
 海梅へまご決ねると同ふ
 根緒と押あそぶ船と十四五の
 船政かむして中を流りたる
 五日一ねへまあそぶ前





の通
 松の
 因換の
 体心
 女振
 小の
 小僧
 上げ

必
 須
 入
 必
 須
 入
 必
 須
 入
 必
 須
 入



自
 申
 申
 申
 申
 申
 申
 申
 申
 申
 申

必
 須
 入
 必
 須
 入
 必
 須
 入
 必
 須
 入

日

日



おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの

おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの
おまかせの

命之養生善惡鏡

折本 一冊

教訓善惡図解

折本 一冊

清華

五十二餘

日一冊

と

折本

徳川年代鑑

大功記銘傳

八冊

日本 名所 神社佛閣

と

五号出版

俳優忠臣藏

色入小本品々

色圖 繪入 單語圖解

魔島紀事

六冊

龜

地本問屋

浅草區瓦町十二番地
島鮮堂 網島龜吉

Handwritten text in cursive script, likely Japanese calligraphy, on aged paper. The text is faint and mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

010190517093

Decorative endpaper with a blue and white geometric pattern. The pattern consists of interlocking lines forming a complex, lattice-like structure. There are two large, dark, rectangular areas of damage or staining on the paper, one near the top and one near the bottom. Faint handwritten text is visible on the right side of the page, partially obscured by the damage.

沃村因之也說

其冊之內

